【参考文献】

■ 図鑑・事典類

鳥類原色大図説　全Ⅱ巻　　黒田長禮（修教社書院　１９３３）
日本鳥類大図鑑　全Ⅲ巻　　清棲保之（講談社　１９７８）
生物大図鑑「鳥」　　（世界文化社　１９８４）
標準原色図鑑全集「鳥」　　小林桂助（保育社　１９７７）
野鳥の事典　　清棲幸保（東京堂出版　１９７２）
野外観察用「鳥類図鑑」　　日本鳥類保護連盟編（日本鳥類保護連盟　１９７２）
日本の野鳥「羽図鑑」　　笹川昭雄（世界文化社　１９９５）
カラー学習図鑑⑤「鳥」　　（旺文社　１９７２）
原色学習ワイド図鑑「鳥」　　（学習研究社　１９８２）
世界鳥類図鑑　　（同盟舎　１９９６）
絶滅・野生動物の事典　　今泉忠明（東京堂出版　１９９６）
日本鳥類目録「改訂第６版」　　日本鳥学会編（日本鳥学会　２０００）
生態学事典　　日本生態学会編（日本生態学会　２００３）
ハンディ図鑑「日本の野鳥」　　（山と渓谷社　１９９８）
検索入門野鳥図鑑「陸の鳥・水の鳥」　　中村登流（保育社１９８６）

■ 学術書等

鳥類の研究「生態」　　黒田長久（新思潮社　１９６７）
絶滅の生態学　　宮下和喜（思索社　１９８２）
保全生物学　　（東京大学出版会　１９９６）
森に棲む野鳥の生態学　　由井正敏（創文社　１９８８）

■ ガイドブック等

フィールドガイド日本の野鳥「増補改訂版」　　高野伸二（日本野鳥の会　２００７）
森の野鳥「自然と友だちになる法」　　由井正敏（学習研究社　１９８８）
日本の野鳥・生態の記録　　小笠原暠（毎日新聞社　１９７３）
野生鳥類の保護　　日本鳥類保護連盟編（日本鳥類保護連盟　１９７６）
自然観察と生態「日本の野鳥」　　高野伸二（小学館　１９７６）
原色「野鳥」　　柳沢紀夫（家の光協会　１９７７）
カラー日本の野鳥１・２　　（山と渓谷社　１９７０）
野鳥識別ハンドブック　　高野伸二（日本野鳥の会　１９９１）
原色・自然の手帖「野鳥」　　高野伸二（講談社　１９６７）
野鳥ガイド　　中村登流（光文社　１９７０）
バードウオッチング　　日本野鳥の会編（日本野鳥の会　１９８６）
自然読本「野鳥」　　（河出書房新社　１９８０）
渡り鳥　　（東海大学出版会　１９７９）
愛媛の野鳥「観察ハンドブック」　　（愛媛新聞社　１９９２）
森の生態学　　四手井綱英（講談社　１９８１）
山梨の鳥　　中村 司・依田正直（山梨日日新聞社　１９７７）
甲斐の鳥たち　　中村幸雄（山梨日日新聞社　１９６９）
山梨の野鳥　　やまなし野鳥の会 編（山梨日日新聞社　１９９７）
野鳥の名前　　叶内拓哉･安部直哉（山と渓谷社　２００８）
仏法僧の不思議　　笠井湧一（幻冬舎ルネッサンス　２００６）
鳥６３０図鑑　　日本鳥類保護連盟編（日本鳥類保護連盟　１９８８）
日本の野鳥　　（山と渓谷社　１９９０）
インターネットフリー百科事典　　（ウィキペディア財団）

【編集執筆者】

（50音順）

■編集委員

依田　正直（委員長）
市川　孝次
遠藤　博文
小林　美博
杉原　　廣
野沢　　久（事務局）
藤原　正貴

■執筆者

市川　孝次
井上かよ子
遠藤　博文
大倉　昌幸
笠井　雅人
窪田　　茂
河野　恵子
小林　美博
斉木　秀二
坂本　弘子
渋谷　秀夫
清水　　誠
杉原　　廣
中村　　司
野沢　　久
林　　和行
樋川　宗雄
藤原　正貴
村山　　力
依田　正直

■装丁・レイアウト

野沢　　久

■写真提供者

（会　員）
大倉　昌幸
甲斐　大志
窪田　　茂
黒田　典男
小林　美博
渋谷　秀夫
清水　　誠
杉原　　廣
長馬　亜夫
中村　　司
成田　敏夫
野沢　　久
樋川　宗雄
藤原　正貴
宮地　要子
村田　雅生
依田　正直（野鳥イラスト共）

（非会員）
井坂　　瑞
輿水　一郎
小林　好文
坂井　正志
佐藤　繁納
高田　範之
高野　　丈
高橋たまえ
土屋　　潔
中居　　稔
成川　　治
西村　光真
野口　正裕
平田　寛重
廣瀬　志保
山下　俊夫
渡辺　　毅

■情報提供者

青木　　進
中山　博友
西　　教生（野鳥写真共）
樋口　星路
樋口　直人
水越　文孝
湯本　光子
富士山麓支部
甲府支部

あとがき

本会が創立４０周年記念の一環として鳥類目録を刊行した意図は、日常活動の実践の成果は年４回発行の機関誌「カワセミ」に発表済みなので、この４０年間に自然界に起きた象徴的な出来事（変化）を的確に反映し、表現したものを形にして残したいという理由からである。

とりわけ、この４０年間は野鳥の生息環境が急速に変化した時代であり、レッドデータブックの作成を皮切りに、生物多様性の国家戦略の策定や国際的な取り組みなど野鳥を取り巻く課題が山積された時期である。鳥類目録はそうした環境変化を科学的な視点で読み取れる基礎資料でもあるから、継続して刊行することに意義があると思われる。

しかし、広域的な調査を継続して実施するためには、組織の強化をはかりながら精力的に活動を進めなければならない。同時に客観性や実証性の高いデータの集積を目指して、科学的な調査法をより多くの会員が学習する機会を設ける必要もあろう。

野鳥を楽しむには、野鳥の種類と数が減ってしまわないことは勿論のこと、野鳥が自然の中で生きいきとした姿を見せ、飛び交い囀る、そんな豊かで多様な環境が前提となることは当然である。

終わりに、今回の鳥類目録の編集に際しては多くの会員から情報が寄せられたこと、また会員以外の野鳥に関心の高い人や団体からデータや生態写真の提供などでご協力をいただいたことなど頭が下がる思いでいっぱいである。また編集委員各位には９月から半年以上にわたり、毎週編集作業を推進していただいたことに衷心より感謝する。

（文責　依田正直）